

よきおとずれ

カトリック釧路教会だより
〒085-0018 釧路市黒金町12丁目10
第3号 2015年8月15日発行



その朝、ぼくは十歳だった

ヘルマン 渡辺 義行神父

昭和20年7月14日、釧路は米軍機からの空襲で200人近い市民の方が犠牲になりました。街は三日三晩燃え上がり、夜空を真っ赤に染めるほどでした。

当時、わたしたち家族は米町に住んでいました。

灯台の上空に現れたグラマン機を目にするや、脱兎のごとく防空壕に飛び込んだのです。と同時に機銃掃射が始まりました。私たちは、恐怖におののき只ひたすら息を凝らしていました。母の背には一歳の妹がいたのですが、もう泣く力もありませんでした。栄養失調になっていたからです。

空襲から十日後、妹が亡くなりました。妹は、ミカン箱に入れられおまわりさんと近所

のおじさん、それに私の三人でリヤカーを引いて墓地に向かいました。墓地の中に大きな穴が二つあるのに気づきました。それは、投下された爆弾の穴で、亡くなった人たちが葬られるのだと大人たちが話すのを耳にしました。

妹が息を引き取ったあと、私は妹の顔をじっと見つめていました。すると、妹の顔に笑みが浮かんだのです。あれは、きっと神さまからの贈り物だったのではないのでしょうか。

広島で被爆し、洗礼を受けて癒され、原爆の語り部として活躍された長谷川儀神父さんから「あなたも語り部になってください」と言われた言葉にお応えするつもりで、釧路空襲の出来事を綴ってみた次第です。



旧カトリック新川教会にて 50 余年

セシリア 日根 洋子

釧路市にカトリック新川教会が建てられましたのが、昭和 33 年の春と聞いております。そのカトリック新川教会で初めての結婚式が同年の 11 月 22 日、聖セシリアの祝日に私達は、ステファノ神父様の司式で結婚式を挙げていただきました。

聖堂は畳敷きで約 20 畳位、聖堂の入口を中に入ると右側にご聖体安置所がありました。私達は幼きイエズスの聖テレジアの保護者のカトリック新川教会信徒の第一番目の結婚式となりました。翌年 8 月 15 日に、私は受洗しました。ステファノ神父様は子どもたちの教理や侍者の練習等信仰に対してはとても厳しく、それ以外は優しく何時も笑顔で誰とでも親しくお話をしてくださいました。当時の信徒数は約 30 人位でしたが、5 年も経たないうちに御聖堂が信者さんで一杯になり、隣りに二階建ての仮聖堂ができました。聖母訪問会修道院が開院され、年々活気が出てまいりました。

色々な出来事が走馬灯のように次々と浮かんでいきます。真夜中より始まったクリスマスのごミサ、その後の楽しいパーティ。子供たちの聖劇、お父さん達の手品やお母さん達の遊戯、踊り、会長さん直伝の神父様のドジョウすくい等…、新年会もゲーム大会、ビンゴ等次々と余興に時間の経つのも忘れる位でした。

昭和 43 年、今度は本格的に教会の建築の相談、会合と何度も意見の交換を重ねま

した。

新しい教会が出来てから新川教会で初めて釧路教会と合同で聖体行列を行いました。忘れることの出来ない荘厳な光景でした。

平成 20 年、金婚式のごミサも何とか無事に済み、ふと振り返ると家族は、特に私は生死の境を何度か振り切ってまいりました。それは神様のなさった業、御心だと思えます。神に感謝。



“打ち水やはね返りくる兎の返事”

”自適悠々、金魚すいと体かわす”洋子

憎みても余りある原爆

フランシスコ・ザベリオ 糸沢 定雄

私は陸軍船舶特別幹部候補生として、爆心地から 10 km ほど離れた広島湾の江田島で特攻訓練を受けていた。

8 月 6 日、当日は朝から暑く、私たちは上半身裸になって兵舎で上官から訓練のための講話を聞いていた。突然、暗い室内がマグネシウムでも焚いたように隅々まで明るく照らし出され、近くで大爆発があったような大音響と衝撃を感じた。私たちは急

いで防空壕に退避したが、振り返って広島市の方を見ると上空に巨大なキノコ雲がムクムクと上昇していくのを見て驚いた。私たちはそれが、世界最初の原爆投下とはつゆ知らず、広島のがスタンクが何かの事故で大爆発したのではないかと信じていた。

翌7日、上官から救護隊派遣の話があり私は志願して似島へ行った。似島は宇品港と江田島の間にある。軍の病院があったところである。間もなく何隻もの機帆船が被災者を載せて岸壁に近づいてきた。中から呻き声、泣き声、叫び声が入り混じって聞こえてくる。不思議に思ったが、船の中を見て、私たち救護隊は一瞬、後ずさりした。そこに積まれていたのは人間であつて、人間でない姿の人々だった。髪が抜け服もほとんど焼けちぎれ、全身の皮膚が剥けて、顔も大きく腫れ上がり、目と口はかろうじてわかるものの人間の顔とも思えなかった。そして「兵隊さーん、痛いよう、助けてえ、水を…」と叫ぶのである。地獄の底をさまよっているような姿に恐怖と驚きですぐには手が出せなかった。比較的、軽症の人を抱き上げ何度も病院に運んだ。朝鮮人の搬入は後回しになってしまった。病院では患者の名前を聞いて荷札に書きとめ、患者の腰に結わえつけた。意識のない人や話の出来ない人は男女の区別、おおよその年齢を書いて結わえつけた。

応援が来るまで一人で50人もの重体患者を受け持った。外から戻ると歩くことは

おろか、動くことすらもできないはずの患者が痛みと苦しみに、のたうちまわってずっと離れた場所まで転がって行って死んでいた。何とかしてあげたくても何もしてあげられない。瀕死の子どもは、せめて母親がわりにと息を引き取るまで抱えていることしかできなかった。

似島に来てから1週間後、今度は広島市内の後片付けを命じられた。広島市の市街地は一面瓦礫化して崩れ落ち、眺めを遮る建物はほとんどなかった。街中どこへ行っても死体があつた。被爆の傷みに加え、1週間、真夏のかんかん照りの中に放置されて腐乱し、目をおおうばかりであつた。広島市内を幾筋も流れていた川にはいくつもの死体が流れており、この世の地獄を見る思いで逃げ回っていた。

8月15日終戦。私は8月20日に特攻隊として沖縄に向けて出撃の予定だったが、かろうじて戦死をまぬがれた。死はまぬがれたものの、私は広島で地獄絵図を見てきた。あの日、私の手に抱かれて逝った子どもたちの温もり、泣き叫ぶ被爆者の声、ずるりと剥ける被爆者の皮膚の感触。こびりついた死臭。目鼻を失った顔。それらはこれからも一生、私の脳裏から消し去ることはできない。

「被爆者」は私たちだけにしてほしい。そして世界からこの非人道的な核兵器を絶滅させなければならない。

信徒発見 150 周年巡礼の旅

5月18日～22日まで信徒発見150周年巡礼の旅に参加された佐野愛さん（柏林台教会）に写真をご提供いただきました。その一部を掲載します。



信徒発見 150 周年記念レリーフ



冷水教会の御聖堂



11月29日（待降節第一主日）からのミサの変更①

第一弾として、動作・姿勢と福音朗読の与り方をご紹介します。

1) 動作・姿勢

ミサの中では立つことと座ることを基本的な姿勢とします。パンとぶどう酒の聖別のとき、会衆はひざまずくのではなく**立ったまま手を合わせます。そして、聖別の祈りの後、司祭・助祭とともに手を合わせて深く礼をします。**

2) 福音朗読

司祭は、「○○○による福音」と唱え、親指で福音書、ならびに自分の額、口、胸に十字架のしるしをします。会衆に対する指示、「**主に栄光**」と唱えながら、**会衆も司祭と同じように自分の額、口、胸に十字架のしるしをします。**

（新しい「ローマ・ミサ典礼書の総則」に基づくミサの変更箇所より）

編集後記

今回も多くのご原稿を頂きまして、大変有難うございます。

特に、原爆の体験記事を読ませて頂き、本当に今は平和なのだと思感させられました。

この平和を子供や孫の代、そして未来永劫続けて行くためにも、憲法を解釈一つで、またあの忌まわしい時代へと、逆行することだけはないようにと願い、祈るばかりです。

(H.K)

カトリック鉤路教会 〒085-0018 鉤路市黒金町12丁目10

TEL 0154-22-5823 FAX 0154-22-5832

教会だより 編集：広報委員会